

林芳正外務大臣の2回目の中南米諸国歴訪

ラテンアメリカ時報編集部

林芳正外務大臣は、G7 広島サミット開催を半月後に控えた本年（2023年）4月29日から5月5日まで、トリニダード・トバゴ、バルバドス、ペルー、チリ、パラグアイの中南米5か国を訪問した。これは、1月の中南米4か国（メキシコ、エクアドル、アルゼンチン、ブラジル）の訪問に次ぐもので、日本の外務大臣が半年間に2度、これだけ多くの中南米諸国を訪問したのは、要人往来の再活性化を印象づける画期的な出来事であった。

林大臣は、訪問後の記者会見で、今次訪問を通じ、「価値や原則を共有する重要なパートナーである中南米諸国との友好関係を深めることができ」たほか、「ロシアによるウクライナ侵略、中国、北朝鮮を含む東アジア情勢等の国際社会の諸課題について率直に意見交換をするとともに、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序を維持・強化するために更なる連携を図ることを確認」したと述べた。また、「鉱物・食料・エネルギー資源の宝庫でもある中南米諸国は、現下の国際情勢において、その重要性が増しており」、「これらの国々と二国間経済関係強化の方策について有意義な意見交換」ができたほか、「我が国と中南米の大事な架け橋となっておられる日系人の方々との交流を深め」、「日系企業関係者などと懇談し、各国との関係の活性化の方策について議論」できたと総括している。

本稿では、今次訪問国に駐在する各大使に、林大臣の訪問のハイライトについてインタビュー形式で伺った。以下、訪問順に記載。

【トリニダード・トバゴ：松原 裕大使】

—林大臣は、ブラウン外務大臣とヤング・エネルギー大臣と会談し、来年（2024年）の外交関係樹立60周年、「日・カリブ交流年」に向けて二国間関係を更に促進していくこ

とで一致したようですが、具体的な内容を教えてください。

5月1日、日本の外務大臣として初めてトリニダード・トバゴ（以下TT）を訪問した林大臣は、エイマリー・ブラウン外務大臣の歓待を受け、TTの代表的民族楽器スティールパンによる両国国歌演奏の下、外務省にて国旗掲揚式が行われました。外相会談では、来年の外交関係樹立60周年も含めて協議し、共同プレスリリースを発出しました。

TTは、カリブ共同体（カリコム）の主要な加盟国であり、日本とは自由、民主主義、法の支配といった基本的価値や原則を共有し、環境・防災分野等を含む様々な協力や人的交流を行ってきました。このような友好関係を踏まえ、両大臣は、今後も二国間関係を一層拡大・強化し、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序の実現に向け、国際場裡において更に連携・協力する決意を表明しました。

また、来年の60周年に向けて、昨年両国間で立ち上げた合同タスクフォースを通じ、教育・文化・学術交流、経済協力、観光促進、スポーツ交流など幅広い分野において協力を拡大・深化させつつ、具体策について協議を進めることになりました。

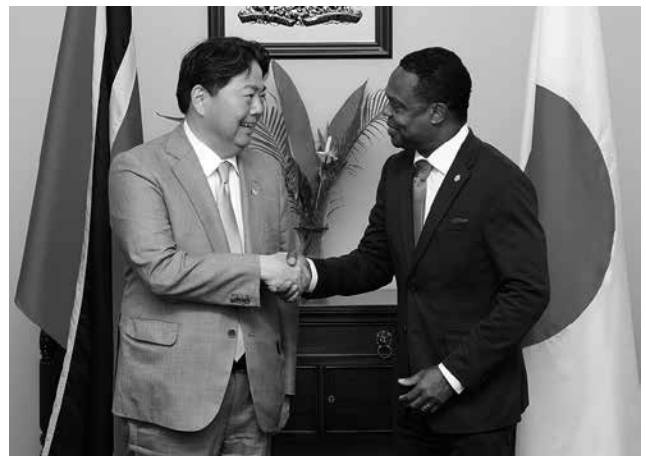


写真1：ブラウン外務大臣との会談（以下写真はすべて外務省提供）

ー林大臣は、日本企業が出資するカリビアンガス化学社（CGCL）のメタノール生産プラントを訪問されたようですが、日本企業の進出やエネルギー分野における両国の協力の展望についてお聞かせください。

今回林大臣は、カリビアンガス化学社（CGCL）のメタノール生産プラント視察に加え、同社幹部との意見交換も行いました。CGCLは、三菱グループとTT国営ガス会社及び同国企業マッシー・ホールディングス社が共同出資する合弁企業であり、2020年12月からメタノール／ジメチルエーテルプラントの商業運転を開始、2022年1月には100万トンの輸出を達成しています。昨年（2022年）のロシアによるウクライナ侵略を受け、経済安全保障の観点からもCGCLの重要性は益々高まっています。

TTでは丸紅による発電事業、東芝による下水処理事業、トヨタによる日本車の輸入販売など、日本企業が複数進出し、ビジネスの他、地域社会への貢献活動にも精力的に参加しており、更なる日本企業の活躍が期待されます。



写真2：CGCLメタノール生産プラントの視察

【バルバドス：福嶋香代子大使】

ー林大臣は、モトリー首相を表敬するとともに、シモンズ外務大臣と会談されましたが、小島嶼国特有の脆弱性克服に向けた協力含め、二国間関係の強化に向けた今後の展望についてお聞かせください。

林大臣はモトリー首相及びシモンズ大臣との会談において、日本はこれまでバルバドスの小島嶼国特有の脆弱性に鑑み、一人当たりの所得水準のみを基準とはせずに支援を行ってきており、今後かかる脆弱性克服に寄与すべく必要な支援を行っていく旨述べました。このような考え方にに基づき、今後も環境、気候変動、防災等の分野において着実に協力を積み重ねていくことが肝要と考えます。



写真3：モトリー首相への表敬

両国はまた、ウクライナ、東アジア等の国際情勢について議論し、自由・民主主義・法の支配等の価値を共有する国として世界のどこにおいても力による一方的な現状変更は許されないとの認識で一致し、国連の機能強化、核軍縮・不拡散等の国際社会の諸課題への対応についても、今後とも連携していくことを確認しました。会談の成果を踏まえ、国際場裡でグローバルサウスの立場を代弁し発言力を強めているバルバドスとの協力・連携を深めていく必要があります。

更に、今回の林大臣の訪問を通じて来年の「日・カリブ交流年2024」に向けて二国間及び日・カリコムの交流を強化していくことについても確認されており、この分野での取組も重要と考えます。



写真4：シモンズ外務大臣との会談

ーモトリー首相が提唱する「ブリッジタウン・イニシアティブ」など気候変動と国際開発資金をめぐる問題について、日本に期待される役割についてお聞かせください。

モトリー首相は、ブリッジタウン・イニシアティブを掲げ、気候変動、自然災害に対し脆弱な国々

を支援するため、国際開発金融機関（MDBs）改革の一環として国際通貨基金（IMF）の特別引出権（SDR）の活用等により国際社会が新たな資金メカニズムを構築することを提唱しています。この関連でモトリー首相は林大臣に対し、日本が先頭に立って本年4月の世銀・IMF春期会合において、低所得国・脆弱国支援のためにSDRのチャネリング上限を40%までに引き上げることをブレッジしたことを高く評価する旨述べ、今後も日本が同イニシアティブの関連でG7等において指導力を発揮していくことへの期待が表明されました。日本が引き続き低所得国・脆弱国の声に耳を傾け、この問題について国際社会の連携を主導していくことが期待されています。

【ペルー：片山和之大使】

—林大臣は、ボルアルテ大統領を表敬するとともに、ヘルバシ外務大臣と会談を行い、本年の外交関係樹立150周年を迎えた両国関係を様々な分野で一層強化していくことで一致したようですが、具体的にはどのようなやりとりがあったのでしょうか。

日本とペルーは普遍的価値を共有する「戦略的パートナー」です。その関係は政治、経済、文化、学術、人物交流等多岐にわたっています。

両国はウクライナ、東アジア等厳しい国際情勢の中、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序の実現に協力していくことで一致しました。

経済面では、鉱物・エネルギーの主要生産国であるペルーと世界的なサプライチェーン強靱化に向けて共に協力していくこと、また、租税条約、経済連携協定（EPA）、環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定（CPTPP）等を活用し、

ICT分野を含め両国経済関係の一層の連携を官民で図っていくことで一致しました。

また、ペルー側から新型コロナ対策や防災を含む持続的・包括的成長のための日本の協力に謝意が表明されました。

その他、記念切手発行、練習艦隊の相互訪問、ヘルバシ外務大臣の訪日、日本ペルー経済協議会の開催、友好病院機材供与、叙勲伝達式、国際日系人対話等の実現乃至その計画が話し合われました。

—林大臣は、南米のスペイン語圏では初となる国際交流基金のリマ事務所の開所式に立ち会われたようですが、今後の文化交流の拠点として、特にペルーとの関係においてどのようなことが期待されますか。

日ペルー外交関係樹立150周年という節目の年に、林大臣及び梅本国際交流基金理事長の出席を得て、リマ日本文化センターの開所式を実施できたのは大変喜ばしいことでした。

ペルーには2021年時点で3792人の日本語学習者がいますが、その6割近くは日系小中学校で学ぶ子どもたちです。高等教育機関ではわずか10人と少なく、日本研究専攻課程も存在していません（以上国際交流基金調べ）。世界で3番目の規模の日系社会を擁しながら、日本語教育及び日本研究において残念ながら十分な水準とは言えません。中国や韓国等の存在感が高まる中、リマ日本文化センターには特に高等教育機関における日本語・日本研究の推進を期待します。

文化・芸術の分野では、ペルー日系人協会（APJ）が劇場・ホールを持ち、多くの日本関連文化事業を実施していることは当地の強みです。彼等とも連携して、日系社会や首都圏の枠を超えたペルー社会へ



写真5：ヘルバシ外務大臣との会談



写真6：国際交流基金リマ日本文化センター開所式、梅本同基金理事長同席

の幅広いアプローチを通じた日本文化紹介に期待したいと思います。

【チリ：渋谷和久大使】

一林大臣は、ポリッチ大統領を表敬するとともに、バン・クラベレン外務大臣と会談を行い、二国間関係の深化や国際場裡での協力について意見交換されたようですが、具体的にはどのような関係深化や協力が期待されますか。

日本とチリは、昨年外交関係樹立125周年を迎えた、長い歴史と価値や原則を共有する重要な「戦略的パートナー」です。

ロシアによるウクライナ侵略をはじめとした現下の厳しい国際情勢の中、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序の維持・強化や、サプライチェーンの強靱化、クリーンエネルギー、気候変動など、重要な国際課題への対応における協力、また、両国の災害対策の経験をもとに、チリを拠点とした防災分野における中南米地域の人材育成に資する、いわゆる「KIZUNA プロジェクト」を通じた、防災分野における更なる協力やチリにおけるCPTPPの発効による両国経済関係の一層の拡充が期待されます。

両国間には、まだ大きな可能性が秘められていると考えます。長年の良好な関係に裏付けられる友好協力関係を通じて、国際社会が直面するこの難局を乗り越え、より良い世界の実現に向けて、両国が共に進んでいくことができると考えます。



写真7：ポリッチ大統領への表敬

一林大臣は、バン・クラベレン外務大臣との間で日チリ科学技術協力協定に署名されましたが、鉱物資源開発やクリーンエネルギーにおける協力の可能性について教えてください。

リチウムなどの重要鉱物資源開発は、経済安全保障の観点からもエネルギー移行の必要性からも重要

で、本年4月、ポリッチ大統領が発表した「国家リチウム戦略」では、環境との共生を目指し持続可能な手法で開発を進めることとされました。そのための技術的なハードルが高いことは、日本の官民にとってチャンスであり、今回締結した日チリ科学技術協定も活用しつつ、チリのリチウム等採掘・輸出に貢献できると考えます。

クリーンエネルギー関連では、日本は、高いポテンシャルを有するチリと水素エネルギー関連のワークショップの開催や民間企業によるチリでのグリーン水素・アンモニアに関する事業化調査等への支援を実施しています。また、本年4月、パルドウ・エネルギー大臣が訪日し、経済産業省と「エネルギートランジションに関する協力覚書」に署名を行ったので、これを契機に一層の協力進展が期待されます。

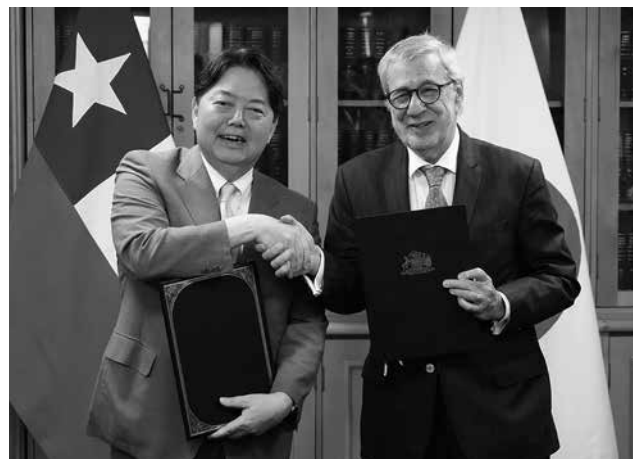


写真8：バン・クラベレン外務大臣との日チリ科学技術協力協定の署名

【パラグアイ：中谷好江大使】

一林大臣は、アリオラ外務大臣との会談を行い、二国間関係や国際場裡における協力などについて意見交換されたようですが、その要点を教えてください。

良好な二国間関係の土台である日系社会や開発援助（ODA）の貢献及び国際的課題への取組における協力について、歴史の転換点ともいえる現下の国際情勢をふまえ、価値と原則を共有する重要なパートナーであることを双方が強く認識した上で、宇宙やエネルギー含め多岐にわたる分野において強化することで一致したことが特筆されます。その一環で、アリオラ大臣から、日本の「自由で開かれたインド太平洋（FOIP）」の取組への支持が改めて表明され、両大洋間回廊プロジェクトが右取組を補完する可能性への言及がありました。



写真 9：アリオラ外務大臣との会談

—林大臣は、当選直後のペニャ次期大統領を表敬されましたが、今後の日本との関係について、先方からどのような見解が示されましたか。

ペニャ次期大統領より、冒頭、歓迎の言葉に続き、日本が国際機関に設けた奨学金で留学できたことへの謝意が述べられたことに、日本への強い思いを感じました。それが、二国間関係をさらに強化していくとの強い決意にも表れていました。また、国際情

勢についても、次期大統領自身の経験もふまえ、二国間の連携につき意見が一致しました。選挙後初となる海外要人の訪問ということで内外メディアの関心も高く、林大臣の訪問は次期政権との日ブラグアイ関係強化に向けた重要な機会となりました。今後も、オールジャパンで多方面における協力の進展に取り組んでいきます。



写真 10：ペニャ次期大統領への表敬

ラテンアメリカ参考図書案内



『ブラジル文学傑作短篇集（ブラジル現代文学コレクション）』

アニーバル・マシャード、マルケス・ヘベロほか
 伊藤 秋仁、神谷 加奈子、岐部 雅之、平田 恵津子、フェリッペ・モッタ 訳 水声社
 2023年3月 211頁 2,000円+税 ISBN978-4-8010-0721-5

独立200周年を記念したブラジル文化普及プロジェクトの一環として水声社と駐日ブラジル大使館のパートナーシップのもとに、京都外国語大学の学内共同研究「ブラジル短編小説アンソロジーを編む」の研究成果でもある、未邦訳の文学作品5タイトルを紹介した「ブラジル現代文学コレクション」（武田千香編）の最新刊。底本は2003年と13年に刊行された。

アニーバル・マシャード（1894～1964年。ミナスジェライス州生まれ）、ジェズエ・モンテロ（1917～2006年。マラニョン州）、リジア・ファグンジス・テーリス（1923～2022年。サンパウロ州）、オリージェネス・レッサ（1903～86年。サンパウロ州）、ハケウ・ジ・ケイロス（1910～2003年。セアラ州）、マルケス・ヘベロ（1907～73年。リオデジャネイロ市）の6人の作家の短編を各2編ずつ訳出している。

20世紀のブラジル（当時の首都はリオデジャネイロ）の社会様相、家族、子ども、恋愛、結婚、嫉妬、死などを取り上げた12本の傑作短編は、そこから人種や階級といったブラジル社会が抱えている問題を描いている。

〔桜井 敏浩〕